

〔釈文〕

一天明三癸卯年六月末方より浅間山鳴出し

七月朔日頃より鳴音強く砂吹出す山の内

東北之方に大内沢といふ沢有此澤より泥湯

火石吹出す荒増聞書

一火交泥湯高サ凡拾五丈程幅三里程吹出す

一利根川筋泥湯大海のごとく又高サ一丈四五尺位

も有之火石数多押込川不残湯ニ成家蔵道具

材木押懸り流来ル人何万人とも数不知其外牛馬

畜類数しれず尤右之石よりほのふ吹出シ右之

火石材木死人押懸り利根川をせきり夫

より本庄裏手廻り小山川へ押込見渡す

所泥海の如し

一薄墨の処は村々家々人々押流され一面

跡絶候村々又ハ火石に当り焼或は家屋敷

泥ニ埋ミ或は火の雨杯と心得蔵杯へ逃込

其俣水死いたし候村どもなり

一藍の処は泥湯押込甚難渋の村々右之

泥湯折々焼上候事誠に恐しき有さま

筆紙に尽シがたし此村の内には処々より

村半分通りて泥押込村半分は石交りの

砂多く降候村も有村々不同有之候へ共夥敷事故

泥砂ともに取捨候処無之併人々多分逃去

人死ハ多く無之候絵図之色天変の村数都合

百六十余村なり

一在宿亦是壱里余之松原などは幅三里残

端々浮島のごとく押出す

一平塚川岸に四間ニ八間の火石押流れ止ル七月

八日昼九ツ時浅間山大内村沢より右の火石同日

七ツ時ニ此川岸ニ来ル凡二十里余の行程を

二時半ニ来ル事矢より疾く鉄砲よりも早し

右火石ニ家道具立木流掛りほのふ焼上る事

類なし恐しき事共也

一浅間山七月五日より大きに焼出し八日迄火石を

出す事夥敷浅間山六七里四方へ火石降絵図之外

北東下野下総仙台台辺ニいたる迄砂灰降是ハ田畑ニ

障候義ハ有之間敷哉下総結城境川岸迄ハ強く

江戸ハ少しくふる安房上総所々より式三寸降

七日八日は両日震動す東海道筋震動之様子

追々申来候先荒増を書記ス